

## 「パウロの模範に見習う」第Ⅱテサロニケ3章6-13節

パウロが今日の6節以降で取り上げているのは、「怠惰な歩みをして、パウロたちから受け継いだ教えに従わないクリスチャンたち」のことであります。彼らは、キリストは間もなく再臨するのだから働く必要はないと考え、働くことをやめていたようであり、そして彼らは落ち着かない生活を送り、人のお節介ばかり焼いて人のパンを食べ、怠惰な生活を送っていたようであり、パウロはそのようなテサロニケ教会のクリスチャンたちのことを聞いて彼らに対してここで厳しい警告の言葉を発しているのです。パウロは今日の6節から13節まで、2回に渡って「主イエス・キリストによって」命じています。しかし、よく見ますと、その対象が違います。最初の6節の命令は、テサロニケ教会の怠惰な歩みをしていない兄弟たちに対する命令です。しかし2回目の12節は、その教会の中で「怠惰な歩みをしている人たち」への命令であります。これらのパウロの言葉から、パウロは決して「怠惰な歩みをしている者たち」を見捨てて、除名処分にしたわけではないことがわかります。むしろパウロは「怠惰な歩みをしている者たち」がその罪を悔い改めて、正しい生活を送ることを牧会者として願っているのです。パウロはまずここでテサロニケ教会のクリスチャンたちに対して、「怠惰な歩みをして、私たちから受け継いだ教えに従わない兄弟は、みな避けなさい。」と命じています。それでは、何故パウロはこのような怠惰な人たちに対してこのような厳しい態度を取ることを命じているのでしょうか。

それはまず第一に、このような人々と交わっているとその罪の生き方が彼らにも伝染する危険があったからです。「朱と交われれば赤くなる」ということわざのように、私たちは良い影響を受けるよりも悪い影響の方が受けやすいからです。ですから、この「彼ら避けなさい」と言う言葉は、彼らの生き方を真似るな、影響を受けないようにしなさいという意味が込められているのだと思います。それはこれら怠惰な生き方をしている者たちは、パウロたちの教えに従おうとする信仰がないからです。もしもそのような信仰が彼らにあったならばパウロがこうして第Ⅱの手紙で再度警告する必要などなかったであらうでしょう。ですから、彼らはクリスチャンであると自称はしていましたが、そもそも神を恐れ、神の御言葉に従おうとする信仰などなかったのであります。ですからパウロはそのようなパウロたちの教えに従おうとする信仰のない者たちはみな避けなさいと命じているのです。これは牧会者のパウロがテサロニケの教会をこの怠惰な者たちから守るために講じた処置なのであります。それはテサロニケ教会のクリスチャンたちをこのような怠惰の罪から守るためであったのです。しかしそれと共に、もしもこのような怠惰な生き方がテサロニケ教会に広がって行ったら教会として全く証しにならないからです。パウロはこのような怠惰な生活はクリスチャンとして恥ずべきことであり、厳しく戒めなければならないと言うのです。それはクリスチャンとしての証しにならないからです。それゆえ、パウロはこうした人々が教会の名誉を汚さないようにこのような兄弟たちと付き合わないようにと命じているのです。クリスチャンが神の恵みに甘え、信仰の美名に隠れ、信仰生活を締めりのない怠惰な生活としてしまうのは実に見苦しいことであります。しかも、教会がこのような怠惰な生き方をする者を援助することは、そのような生き方を容認することであり、まじめに働く教会の兄弟姉妹たちを利用することを許すものであり、兄弟愛の正しい実践とは言えないのです。ですから、怠惰な人への安易な食べ物の援助は決して愛のわざではなく、甘やかしを助長することに過ぎないのです。

またパウロがここで、このような怠惰な生き方を厳しく否定する第二の理由は、それは

そもそも聖書の労働に対する考え方に反するものだからではないでしょうか。

聖書は人間を創造するにあたって、元々エデンの園を耕し、守る者としての使命が与えられていたと記しています。人間は本来働く者、広く文化活動をする者として創造されたのであります。そしてこの労働の中に私たち人間の創造の目的があり、生きる喜び、生きがいがあるのではないのでしょうか。確かに、墮落後の世界では、中々この労働に喜びや生きがいといったものを見出すことが難しくなっており、むしろ労働を苦しみとして捉えている人が多いかもしれません。しかし私たち人間はこの労働を通して誰かのお役に立てる、自分が誰かに必要とされているということに真の生きがいを見いだすことができるのではないかと思います。

最後に三つ目としてパウロがこのように怠惰な歩みを厳しく否定しているのは、それはキリストの再臨を待ち望む者としてふさわしい待ち方ではないからです。

パウロはこのようなキリストの再臨についての誤った見解によって人々が動揺し、本来あるべき生活からはずれてしまう人々が増えていることを心配したのではないかと思います。テサロニケ教会の一部のクリスチャンたちはキリストはもうすぐ戻って来られるので、仕事を辞め、将来の計画など立てずに、ただ主を待っていれば良いと教えていたのです。それは今日風に言えば、もうすぐキリストが再臨されるのだから、大学に行くことも、就職活動をすることも、ましてや結婚をし、子どもを作り、家庭を建設することも意味がないと考えていたのでしょう。しかし仕事をしないことはただ彼らに罪を犯させるだけでした。キリストの再臨に備えるということは人生のあらゆる領域においてキリストに従うことを意味しています。むしろ私たちはキリストが再臨されることを知っているのですから、キリストが再臨なさる時に私たちの生き方がキリストによって喜ばれるように生きなければならぬのです。キリストの再臨を待つ者はこの世での国民としての責任や義務をしっかりと果たし、キリストの愛に生き、キリストの福音を宣べ伝えることこそキリスト者の生き方なのであります。それはキリストがいつ来られても良いように目を覚まし、神から与えられた賜物をこの地上で忠実に用いることが求められているのであります。

パウロはこれらの命令が決して口先ばかりの命令ではないことを示すために 7、8 節で「あなたがたの間で、私たちは怠惰に暮らすことはなく、人からただでもらったパンを食べることもしませんでした。むしろ、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜昼、勞し苦しみながら働きました。」と語っています。イエスご自身もパウロも福音を宣べ伝える者が福音の働きから生活の支え、報酬を受けるのは当然であると考えていました。しかし、それなのにパウロたちはこのテサロニケではいかなる報酬も一切受けませんでした。それはテサロニケ教会の信者たちの中には怠惰で働きもしないで食べ物を得ようとする者たちがいたからでした。パウロたちはそのような間違っただけの捉え方をする信者たちに正しい労働観、いや再臨を待ち望むキリスト者の正しい生き方を教えるために自ら働いたと言うのです。このように「身をもって模範を示す」ことが牧会者パウロの教育法であります。

しかしパウロはそのように語りながら、13 節では「兄弟たち、あなたがたは、たゆまず良い働きをなささい。」と命じています。怠惰な人を甘やかすことと本当に生活に困窮している人を助けることとは根本的に違うのであります。パウロは私たちキリスト者の愛を悪用するような人々が多数いるとしても、それだからといって良いことをしたり、私たちの援助を必要としている人々に対して助けることを惜しんではならないと言うのです。ここでは真の兄弟愛とは何かが問われています。キリストの再臨を前にして私たちもまた怠惰な歩みをするのではなく、パウロの模範に倣って、仕事に忠実に励み、たゆまずキリストの愛と福音を証しする、良い働きをする者になりたいものです。